

# 無量壽

平成19年1月1日  
浄土真宗 本願寺派  
林徳寺 発行  
025 - 276 - 3456

## 浄土真宗物語⑨

「長男の善鸞様を義絶されるといつつらい経験をされた後も、聖人は京都において多くの著述を残されました。浄土真宗物語⑥にも書きましたが、『正像末和讃』を書かれたのは善鸞様を義絶された翌年、聖人八十五才の年です。また八十八才の年に『弥陀如来名号徳』を書いておられます。

このように精力的に活動が続けられた聖人も、残念ながら一二六二(弘長二)年十一月二十八日(現在の暦では翌年の一月十六日にあたります)、九十才をもって御往生を遂げられたのです。

聖人往生の様子を、第三代の宗主である覚如上人が『御伝鈔』に次のように書いておられます。

— 聖人 弘長二歳 壬戌 仲冬(十一月)下旬の候より、いささか不例(病気)の氣まします。それよりこの方、口に世事をまじえず、ただ仏恩のふか

きことをのぶ。声に余言を表さず、もつぱら称名たゆることなし。しこうして、おなじき第八日(下旬の第八日で二十八日を表します) 午時(正午頃)、頭北面西右脇(頭を北にし、顔を西に向けて、右脇を下に横たわる)ことで、お釈迦様が亡くなられたときの姿です)に臥したまいて、ついに念仏の息絶え終わりぬ。 —



聖人御往生 (武永模雄画)

聖人が亡く

なられたのは、弟の尋有僧都の寺である善法院であったと言われている。その跡地には現在、本願寺角坊別院があります。臨終の枕辺には、末娘の覚信尼様と、越後から上京していた三男の益方入道、そして数人の門弟がおられました。奥様の恵信尼様は、残念ながらお出でになることはできなかつたようです。

二十九日に京都東山の延仁寺で火葬にされ、



角坊別院

翌三十日には鳥辺野の北の大谷に納骨されました。

このことは覚信尼様からすぐにお手紙で、母である恵

信尼様に伝えられたようです。そのお手紙は残されていませんが、恵信尼様からの返事のお手紙が今も伝えられています。

— 去年の十二月一日のお文、同二十日あまりに、たしかに見そうらいぬ。なによりも、殿の御往生、なかなかはじめ申すにおよばず候(御往生なさったことは間違はなく、あらためて申すまでもありません)。 —

と、そのお手紙には書かれています。ここには、念仏一筋に生き抜いた夫 親鸞聖人への深い信頼と思慕、そしてその精神を子や孫に受け継いでもらいたいという母の大きな願いが込められています。

(続く)

# 浄土真宗の作法・心得（シリーズ6）

## 行事 々の一）

仏教全般あるいは浄土真宗の教えに基づく行事がいくつかあります。今回はその中でも、特に各家庭で行っていただきたい行事を紹介します。

### 〈家庭での行事〉

○朝・夕のお参り…「昔はお仏壇にお参りをしないうちは、朝ご飯を食べさせてもらえなかった」といった思い出話をお年寄りから聞くことがあります。残念ながら最近ではなかなかそうはいかない状況があります。けれど、**報恩感謝の思いを家族で共有する**ことは、特に子ども**の人格形成に大きな働きをする**と言えます。是非時間を作ってお仏壇にお参りをしたいものです。

○食事…食事の始めと終わりに合掌し、「食前の言葉」「食後の言葉」を唱えます。

これは、**多くの命を頂いて私が生かしてもらっていることへの感謝の思いを表した行事**です。私たち人間はもとより、この世のすべての命の中に、死んでもよい命な

どはひとつもないのです。動物でも植物でもそれは全く同じです。しかしそのような命を頂かなければ生きていかれないのが私たちであることに気づき、毎日の食事のたびに、そのことへの感謝の思いで合掌をするのです。

### 食前の言葉

**御仏と皆様のおかげにより、このごちそうを恵まれました。深くご恩を喜び、ありがたく頂きます。**

### 食後の言葉

**尊いお恵みにより美味しく頂きました。おかげでごちそうさまでした。**

○月忌…月々の故人の命日を月忌と言います。

命日とは、その言葉の通り「命の日」です。この日は、私たちの命が今ここにあらるまでに、先祖をはじめとする多くの方々のおかげがあったことにあらためて感謝をし、特に丁寧にお仏壇にお参りしたいものです。

## 日本語になった仏教の言葉 ⑨

### 《馳走》

「ご馳走さま」という日常語は、食事の後で言わねばならない言葉としてしつけられてきたものですが、この頃の家庭にはこうしたしつけもなくなりつつあるのではないかと思います。

馳走とは駆けめぐり走り回ることを言います。人のために駆けめぐり走り回ること、やがて相手の者に感謝の心を起こさせます。自分がこうしておられるのは、彼の努力のおかげという思いは、また広く自分に与えられるすべてのものに対しても言えることでしょう。ことに我が身体が養われる食物が、多くの人々の馳走のおかげによるものであることを思うとき、「ご馳走さま」という感謝の言葉となってきたことは嬉しいことに思います。

また馳走は、人のために奔走する意味から、人に饗応するときにもこの言葉を用いますし、豪華な食事にもこの言葉を使います。

『私たちの言葉』経合芳隆より